『地域資源の再発見』

講師
東京大学　大学院工学系研究科　教授　西村幸夫　先生

今回、『地域資源の再発見』と題し、東京大学大学院教授の西村幸夫先生を講師にお招きし、甲府城周辺におけるまちの歴史や個性、また、それらの地域資源を活用したまちづくりについてお話しいただきました。先生の地域の個性を大切にし、昔と今の人々の思いを受け止めるまちづくりへの考えが会場の共感を呼び、大変有意義なセミナーとなりました。

講演内容（一部抜粋、要約）

【都市計画と地域の個性について】

私は都市計画をやっていますが、都市計画の中でも特に地域の個性を大事にするような計画をよくやっておりました。都市計画というとやはり、道路を造っていくとか、あるルールを決め、いろいろなものをコントロールしていきますので画一的になりがちです。少し私のバックグラウンドをお話ししますと、私が教育を受けた 70 年代は、そのようにやることが主流でした。1 メートルでも長く道路を造ること、非常に密集した住宅地をどの様に再整備するか、郊外に都市化が進んでいくのをどうしていくかなどの問題を解決していく。その為に、ある基準で効率よく、色々な事を進めていかないといけない。非常に大規模な再開発、そして不燃化を進めていく。そういうことをずっと講義で習っておりましたし、私達が学生の頃は高度成長期を支えてきた先生方が講師でしたので、それが当たり前の“都市計画”と思って育ってきたわけです。

しかし、私自身は非常にそのことに違和感がありました。そういった手法で街を大きく変えていき、近代化していくわけですけれど、色々な町の記憶や、生活を変えていき、画一的に街を近代化していくのは本当に良いのだろうかと思うようになりました。そういったことに違和感を持ち、少し違う、地域の個性を大事にする様な都市計画を模索しました。歴史的な町並みを守り、歴史的な建物をベースに街を計画することを全国各地で、色々やってきました。

最初はそういうことをやっているのは非常にマイノリティーでしたが、次第にそういったことがいいことだと時代が変わってきました。私も景観法を作るときには中心的に関わり、2004 年に法律もできました。そして、2008 年の歴史まちづくり法という法律にも関わりました。このように地域の個性を大事にするまちをつくっていくというのが、今、我々が教えている学生にとって当たり前になってきました。今の若い人達は本当に古いものが大好きなのです。

私がやってきたことが少しずつ認められてきましたが、もう一つ先に進みたい。というのは、地域の個性を考えると、当たり前ですが、残っている建物や町並みをベースに考えるのです。
例えば、先程まで外に睦沢学校が見えておりました。今は藤村記念館になっておりますが、もともと睦沢にあったものが武田神社に移され、そして、この甲府駅北口が再開発できれいになり、もう 1 回移されました。国の重要文化財ですが、こういうものがあることがとても手掛かりになる。それはよく分かります。しかし、そういうことをやっていくと、非常に歴史のある都市だとか、戦争に遭わなかった街は、色々なことをやりやすいのですが、日本中にそういう所があるわけではないし、それに同じ都市でも非常に個性がある所は、都市のごく一部に限られ、都市全体というのは、中々そうはいかないわけです。そうすると、やっていることが非常にコアなところから始まって広まっていくのはよいのですが、どこの街でも応用できるという感じがしないので、もう少し一般化できないかということを考えておりました。

それでもう一度、まちをそういう目で見直しました。それぞれのまちの個性を見るということ

と、自分の方法論をもう少し深く考え直しました。それが地域資源の再発見ということに繋がります。

今日は2つのお話をしようと思っています。1つは私の考える甲府の個性です。私がまちづくりをやってきた目で、何が感じられたかということをお話しします。そして、その1つの例として、甲府城周辺で山梨県と甲府市が一緒になり、何か改善をしようという計画に去年1年携わりましたので、そのことも少しご紹介したいと思います。

【甲府の個性について－反転都市－】

私の考える甲府の個性は幾つかありますが､1つは中世と近世が接続している点です。この図は明治24年当時の市街です。1903年なので、まだこの時点では鉄道は引かれていませんが、この後、鉄道がここに引かれます。

地図を見ると､武田の館から4本の道が出ていて、中世の都市の姿が見えるわけです。躑躅ヶ崎に館ができ、中世の都市ができました。ですから、中世といってもできたのは1519年です｡1519年の武田信玄の父親である武田信虎から、親子3代60年の間になります。

近世になり甲府城と城下町が造られるわけですが、中世の都市と近世の城下町の両方が共存しています。甲府の人にとってみれば、これは当たり前の姿かもしれないですが、実は中世の都市と近世の城下町が共存しているというのは非常に少ないのです。中世の権威を否定し、徳川幕府のお城を造っているので、全く消し去っている所も多く、例えば大分です。大分の有名な大友宗麟の館というのは、今は城下町の外れですけれども、全部壊して新しいお城を造りましたから全く跡形がありません。それは大友の影響を消し去るということもあるかと思います。それと福井の北ノ庄城というのがあって、今の城下町の中にありますが、今は全く分かりません。なので、中世の都市が近世になってもそのまま受け継がれているのは非常に少なく、私が知っている限りでは山口がそうです。山口は中世の都市に付ける形で、城下町ではないですが近世の街ができました。明治維新の直前にお城ができ、城下町になりますが、ほとんど小さな宿場町みたいなものだったので、甲府のように巨大な計画都市をすぐそばにつくるというのは殆どありません。
もう1つの例は、中世の都市にそのまま近世のお城を造り、もとがなくなるというものがあり、そういう場所がたくさんあります。大阪や、金沢がそうです。大体、地形に沿って計画すれば、そこが一番守りやすいので、そういう所を使うわけですけれども、甲府はそのようになっていないのです。ですから、もし、もう少し近い所に城下町ができていれば、多分、甲府の中世の街は近世の都市の中に飲み込まれて完全になくなっていたでしょうし、遠ければ全くの寂れた村になったでしょうから、甲府のように、一続きの都市になっていたことはなかったのです。この3キロぐらいの程よい距離感で、地形的にここがちょうど舌状台地の先端で、甲府盆地が全部見えるというような場所に出てきたということが大きかったのではないかと思います。

これは甲府の古い中世の都市を表している図で、これが武田通りです。実は武田通りは昔からずっとあった道で、この道だけが北から南まで真っ直ぐ近世の城下町が続いていた道です。元柳町､大工町､元連雀町という形で続いております｡それをずっと緩やかな上り坂で上っていくと、今の武田神社に行き着くわけです。反対側を見ると、実に都市をつくるのに良さそうな、なだらかな南下がりの坂道があり、今、住宅がずっと張り付いています。そして、ここが武田の城館の跡で、中世のお城というか、住まいの特徴である正方形となっています。これが武田神社、ほぼ正方形です。これは室町時代の京都にできた花の御所と同じで、正方形の大体二町四方といわれており、約200メートル四方となっています。200メートル四方ぐらいの正方形の館があり、空

堀を巡らせるという中世の館で、その頃の大きな豪族の住まいは、そのようになっております。今、それを皆さんもほぼそのまま感じることができるわけです。

武田神社の鳥居の近くはもう少し造り込まれた石垣ですが、少し西側に歩くと本当に昔のお堀があります。そして、昔の土塁なども感じられます。西側は今、発掘されていて、これは曲輪といいますか、食いちがいの門もあります。これが外堀で、ここは人工的な堀です。現在の都市の近い所に、このような形でこれらがよく残されています。なお、他に関東だと足利の館で鑁阿寺という所がありますが、そのまま残されているものもあります。

そして、近世になるとお城ができた。小高い所にありますので、ちょうどこの盆地がほぼ一望できます。お城から武田の館跡まで 3 キロ離れていて、近世と中世が共存する形となりました。甲府には駅とお城が近いという特徴もありますが、1903 年、ここに駅が造られました。今の新しい駅は少しずれているかと思いますが、ほぼ同じ所にありました。ここがちょうど駅前のロータリーになりますが、この駅というのは中世からある武田通りを受ける形として位置していると考えられます。

甲府がすごく面白いと思うのは時代ごとに表と裏をひっくり返して、さまざまなものをひっくり返しながら都市を展開している点です。中世と近世が共存しているところに、近代になって線路が引かれるわけですが、元々は、古府中や上府中といわれた駅の北側のほうが表だったはずが、近世や、近代には駅の南側周辺が正面となっており、裏表が反転しているのです。

なぜこの場所に鉄道が入ってしまったのかは、分かりませんが、恐らく鉄道を入れるときにこの盆地の北のへりに入れたのではないかと考えられます。耕作地の真ん中に鉄道を入れるよりは、土地を取得しやすく、問題も少なかったのではないでしょうか。ですから、本当に山際ギリギリに鉄道が入っております。

先ほど、駅とお城が近いと言いましたが、これも日本の城下町では非常に珍しい特徴です。特に、県庁所在地で駅とお城が近い所はごく限られていまして、甲府の他には静岡と福井と、それから東京です。東京は非常に特殊で、東京駅は本当に皇居のすぐそばで、非常に特別な場所です。

大阪や名古屋をみても、駅はお城から離れています。普通はお城の周りは市街化されているので、そういった所に駅は来ないわけです。なぜ甲府はそういう所に線路がつくられたのでしょうか。これには幾つか理由があって、1 つは堀を利用して線路を通したのです。ただ、それだけではやはり周りに市街地があるので、市街地を横断しなければなりません。多分、これは想像ですが、この図を見ても分かるように、この辺は元々、武家地がありましたが、当時はあまり、図面でも描かれておりません。なので、武家地がかなり空き地になっていたと思うのです。

そして、もう 1 つの甲府の特徴は武家文化というのをあまり聞かないことです。皆さん、信玄は大好きですが、それ以後はあまり聞かないのです。武家文化や、武家の茶道、武家のお庭などはないのです。これも特色の一つです。なぜでしょうか。不思議ですが、多分、柳沢吉保以降、ここは幕府の直轄地で殿様がずっと代わっていることにあるかと考えられます。ある意味、人事異動で数年間、殿様が来て、家臣を連れてきて、そしてまた別の所に行くと。そういうお城は日本中に幾つかありますが、長いこと代々地つきの武士や、地つきの大名という人がいないわけです。そういう人がいれば、恐らくその後も武家文化があったと思うのですが、そういったものがなくなるわけです。そうすると、どういうことが起きるかというと、明治になった途端にどこかに行ってしまいます。言わば、給与住宅に住んでいたのが、地元に戻るわけです。これが典型的に起こったのが静岡です。静岡は幕領だったので、本当にサラリーマン化し、武家文化が全然残りませんでした。静岡で武家文化の話は聞かないでしょう。武家文化があるのは、昔からの大名が続いている金沢や薩摩など、そういう所は聞くわけです。

こうしたことから、お城の周りが空いていて、お堀も使えたので、うまく線路になったのだと思われます。中央線に乗って甲府に着く直前に左側にお城が見えますが、あの様な形で直前に本当に駅の近くにお城が見える所は、世界でも本当に珍しいです。福井も静岡も近いと言いましたが、間に建物が建っていて、直接は見えません。直接見えるのは、県庁所在地でなければ、福山

などがありますが、県庁所在地ではほぼ唯一です。この個性にはこういった理由があります。

駅をそこに造ることができた。ちょうど中世の城館の正面ではありますが、近世のお城にとってはエッジになります。この図は明治の初めのもので、この辺に鉄道が入りますが、建物はあまり描いておりません。こちらにあった街は描いてありますが、武家地は描いておりません。その意味で開発用地があったことになり、駅とお城が近いだけでなく、県庁も市役所も駅に近いところに建てられます。もっと言いますと、裁判所も警察署も百貨店もですから、ある種、都市の中心的な行政施設など、中心商店街がこれだけ近いのです。ある種コンパクトと言えますが、ここまで近い街はありません。恐らく日本の県都としては最もコンパクトで、500 メートルの範囲にほぼ全ての行政施設があります。お城も含めてです。お城は行政施設と言うか、公園ですね。メインの公園、舞鶴城公園になっております。これが駅前にあるマップです。ここの所に縦に行政施設が並び、それも少しずつ移動はしていますが、ほぼ、最終的にこの位置に集約します。市役所は元々、ここにあったわけではなく、何カ所か移転して、県庁が移った後に入りました。県庁も立て替えてできました。結果的に亥の堀の埋め立てた所がこの平和通りになりますが、平和通りの東側に非常に集約されております。こうして、すごく面白い形でここに駅や街ができているわけですけれども、それが今、駅前の整備で本当に大きく変わっております。

この図は、平和通りです。平和通りは戦後のもので、日本中に平和通りというのがたくさんできましたが、戦災復興のものです。戦争は嫌だということからできた名前で、戦争の記憶を名前にとどめています。これはおそらく甲府日日新聞です。明治 9 年位の絵が着色されたものです。平和通りはまだありませんが、この道が今の舞鶴通りで、県庁の前を通っています。昔は錦町通りといいましたが、錦町通りがあり、それに向かって、今の道が入っています。

そういう道が入り、公共施設、県庁から始まって裁判所、師範学校ができます。県庁、裁判所、師範学校、ほぼ一緒の所に造るわけです。これらの施設は、ほぼ全部が、東側を向いています。ここの辺りがメインで全部東を向いて立っていた。それが今やメインは西側になっているから、そこでも東から西へ反転しています。なぜ東かというと、こちらに都市があるからです。甲州街道が来て、全てそれを受ける形で、全部東を見て主要な公共施設が建っています。

【モダン都市　甲府】

そして、街には藤村式というモダンな建築ができます。こういったモダンな洋風建築を多く並べて近代都市を演出した街が、明治の初期に幾つかあります。一番有名なのは山形です。それと甲府です。これが 2 大近代都市。それぞれ当時の県令、県知事にあたる人が力を入れておこなったからです。山形は三島通庸、甲府は藤村紫朗という 2 人が双璧です。ところが、やり方が違います。福島や宇都宮もそうですが、三島がおこなった山形は、正面に突き当たった所に大きい建物を造りますが、甲府は違います。甲府の特色は、道路が碁盤の目ででき、その中に建物がはめ込まれ、同じ方向を向いて、同じリズムで並び、近代の建築群として近代都市を表現しています。そして、それは今でも感じられます。つまり、県庁があって、市役所があって、通りにそれぞれが立ち並んで建っているでしょう。ですから、突き当たりに、権威の象徴のような配置で建っていないのです。当時としては結構珍しく、それも甲府の個性の一つです。裁判所、警察署、郵便局など、東向きベランダを向けて建てられたコロニアル建築でした。そして、県庁は今、昔の市役所の所にあり、県庁があった所には、もともと甲府中学校があって、学校が移った後に県庁が移り、県庁が移った後に甲府市役所が来ました。だから、同じ公共施設を都心で確保しています。そのようにやり続けてきたというのがこの街の特色だと思います。

1877 年に日本を旅したイギリスの公使、アーネスト・サトウという人が、『日本旅行日記』という本を書きました。その中で甲府の街を、「西洋建築を模倣した建築物の数は街の規模からすれば私の知る限り日本一だ」と表しています。なので、甲府は本当にモダン都市だったのです。戦災に遭ったのでなかなか物としては残ってないですが、、、モダン都市という意味では、山形と甲府が二大都市です。

それと、不思議だなと思うのは、甲州街道が町の南側に通っていますが、街道沿いにはアーケードがないんです。普通、どこの街でも街の中に街道が通っていて、主要街道が通っていると、そこが中心の商店街に大体はなっています。そういう所はお金があるので、商店街がお金を出し合い、アーケードを造ったりする。商店街が横に長く連なることで、百貨店に対抗していこうということになるわけです。しかし、不思議なことに甲府の街はそのようになっておりません。アーケードがありますけれども、昔のまちの場所ではなく、今、アーケードがあるのは全部武家地の場所です。

先ほど武家地の雰囲気が少ないと言いました。甲州街道は八日町から柳町を抜けて、ここに抜けます。八日町のこの角辺りが一番中心です。柳町までが町人地で、その先が武家地です。桜町や春日町など名前が付いていますけれども、これは明治以降に付けた名前で、非常に華やかな名前を付けているのです。紅梅通りとか。こういった名前を、武家地に付けたのです。

これが柳町でここが八日町です。ここに川があって、堀があって、向こう側は武家地です。今はアーケードがここまで来ています。つまり武家地側にアーケードがあるのです。だから、全く江戸時代と、そこも逆転しているのです。江戸時代に一番の中心の町人地と武家地があったのを逆にして、武家地側を商業地にしています。その意味でも反転があると言えるのではと思うわけであります。

ここに現在、城東通りといわれている通りができます。これはある意味、こちら側の官庁街と、賑わいをつなぐという意味だったのですが、それが今、中心になっているわけですからひっくり返っているのです。ここにも反転があるわけです。

そして、町人地と武家地の間のところでちょうど街が変わるのです。それが今でも実は読み取れます。これは八日町ですが、道がクランクになっています。これは皆さんが通ってみると分かると思いますが、町人地のほうと武家地のほうとは少しですが、道が必ずずれている。全然構造が違って、お堀があって世界が違っていたので、それをくっつけたのでこうなるのです。でも、こういうことは気が付かないと気が付かないでしょう。でも、これぐらいにくっきりと町人地と武家地があって、武家地のほうを開発したのだと分かります。これも藤村さんだと思いますが、これは非常に珍しいです。武家地が都市の中心として。だから、空いていたからそれもやれたのですね。誰か有力な人が住んでいた訳じゃないので、サラリーマンがいなくなって自由にやれたからだと思いますけれども、武家地の所を開発したのです。

でも、これを見てください。この幅で開発してすごく狭い道を造っています。実は日本の県都で武家地を計画的に開発して、それが商業の中心になっている例は、実に少ないのです。なぜなら、大体はどこも町人地のほうがその後もずっと栄えています。例としてあるのは博多、福岡です。天神は武家地です。それと熊本で今、上通、下通に巨大なアーケード街がありますが、武家地でした。あとは松山の大街道。これぐらいです。だから、非常に珍しいです。非常に大きく都市を都心で入れ替えして、先ほどのようなクランクができ、今も確実に読めます。これは面白いなと思います。そんな意味で、甲府を反転都市としていますが、ここまで説明しないと全然誰も分かってくれません。

だから、中世から近世に反転して、近世から近代に反転して、近代の中で武家地と町人地で賑わいが反転して、戦後にメイン通りを錦町通りから平和通りに反転する。ある意味、紙を折り広げていくように、次のページに展開していっているわけです。それも非常に面白い。

昔の錦町通り、今は舞鶴通りですね。ここが中心だったわけですが、かつては中心だったということが大事になるような仕掛けがもっと必要だろうなと思うのです。

もっと言うと、県庁の前の辺りが追手門なので、そこから先は新しい道です。こういうことを私は文字通り考える。それがこの反転する度にそれが土地にいろいろな刻印が押されているのです。そういう目で見ると分かる。先ほどのようにちょっとしたクランクなどです。けれども、それはそういう目で見ないと街が見えてこない。普通に歩いているだけですと、生活していて少しクランクしているなと思う位になってします。なので、そこに私はこの街の個性があるのだと思

います。

長い歴史の変化の中で建物は変わるかもしれないけれども、やはり土地に刻まれた歴史というのがあって、土地はパワーを持っているわけです。そういうものを大事にしてあげるということをやると、もう１回、その土地の可能性が光る。だから、私は錦町通りが、非常に可能性があるのではないかと思うのです。

【甲府城周辺地域活性化基本計画について】

錦町通りの所にも関連しますが、甲府、舞鶴城の周辺地域の整備について、昨年関わる機会がありました。県民会館や税務署、それから市の社会教育センターが移転して、空き地になるということが起きて、ここの所を何とかしようというものです。そして、間には民地がありますが、特に県民会館がなくなって、今は駐車場がありますが、他に移転するという計画なので、ここが広場になると、スルっとここが行けるようになるわけです。

そうすると、今までと違うことが起きるのではないか。そのときに何を考えて、何をやらないといけないのか。そのときに、今、申し上げた過去のいろいろな経緯みたいなものをうまく盛り込むと、すごく説得力があって、地元の人にも納得していただけるような計画になるのではないかということになるのです。

この辺にオリオン通りと書いてあります。これが城東通り、これが紅梅通りです。ご承知のとおり、オリオン通りやオリオンイーストという通り、これは戦後です。戦前の開発は先ほど言いましたように、ここから南の武家地を開発したわけです。それから北側はいろいろな官舎が残っていました。つまり、住宅地だったわけですが、そちら側に戦後になって、繁華街になります。オリオンという名前、これは確か映画館の名前ですよね。「オリオンパレス」という名前から来ているわけです。さらに、オリオンイーストというもっとおしゃれな、細い道ができました。つまり、都市としての活力が北に延びてきたわけです。

以前は、アーケードや、コロネードがあったりして、ある種、1 つのセットの中に自分を入れないといけないということがありました。つまり、昔は新しいお店は、商店街のみんなで頑張るというのがあったけれども、今はそうじゃなくて、お店をやる側の一人一人が違うことをやって、違うアピールをすることが大事だという人たちが多くなっています。なので、そういうことをやりやすい通りにやはり可能性がシフトしてくるわけです。それがこの辺だと。そうすると、将来的にこういう所がつながっていくと、ここからいろいろな回遊性が生まれてくるのではないかということをいろいろ議論しました。

これは県民会館前のスクランブル交差点で、県民会館と警察の建物がまだあった頃の写真です。今、そこに建っていた近代の建物が両方なくなって、この後、ここが公園になるわけです。

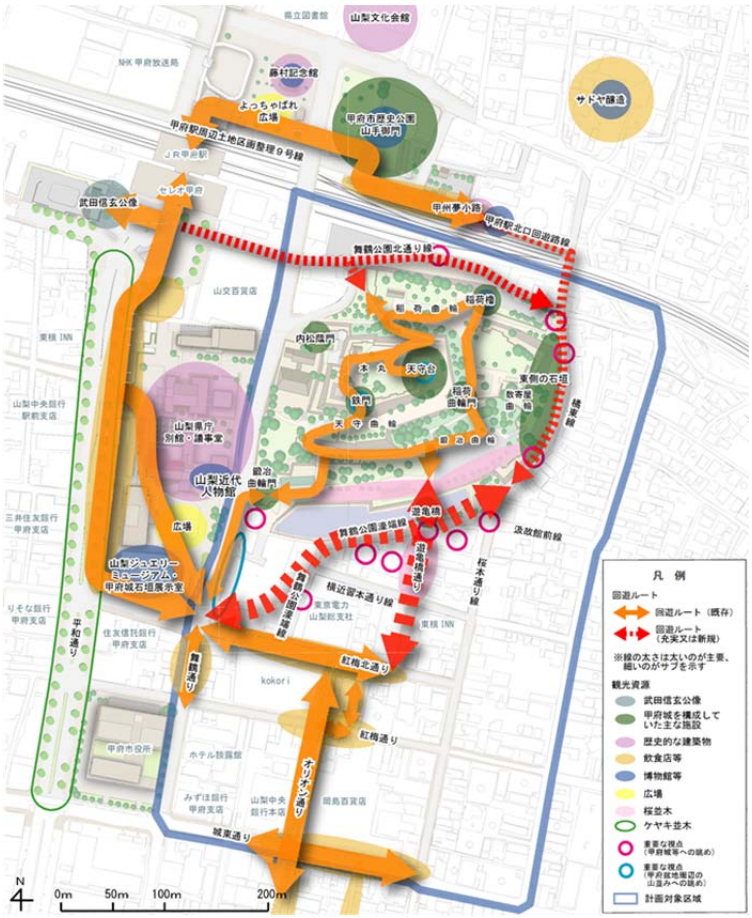
この交差点は先ほど言いました、この辺が追手門前の広場、そして、錦町の一番の中心です。そこから見たときにお城の石垣と、この県庁舎、1930 年に建てられた旧本館の建物、ある意味、統治のシンボルで、その近世と近代の一番象徴的な建物が両方見えます。それどころか、すぐそばに本館があって、モニュメンタルかどうかは分かりませんが、防災新館、2013 年です。だから、そういう面で非常に新しいところまで見えるわけです。その意味で 1 つの歴史をこの 1 つのこのスクランブル交差点に立って見られます。江戸時代から現代まで、どういうふうにこの街が変わってきたというのが見るだけで、何か語ってくれるわけです。

先ほど言ったように、この道がメインだったのが、先に伸びて、線路を通って、そして向こう側に抜ける。新しい物語をここから生み出すわけです。ここがそのお堀で、ここの所が広場になり通れるようになり、更に、税務署と教育センターが移れば、いろんなことができるのではないか。そのときに何を考えたらいいのか。せっかくいろいろな所が動くわけなので、ここだけにとどめないで、この街をもう一回見てもらって、どういうふうにこの街をプレゼンテーションしようかと検討しました。そのために、今はどういうものがあって、どういうふうな動きがあるのかということをまずは調べてみました。

今はここに書いてあるメインに動くというところですけれども。この所では東電があったりして、あまり普通に行けるような所ではないのです。せっかくいろんなものがあるのですが、なかなか普通に街の中を回遊するという感じにはならないわけです。

ここのところに非常に大きなギャップがある。それはある意味、近代にここまでできて、その後、ここが開発されて、その次なのです。ある意味、近代の初期から中期、そして、今ようやくここにたどり着いて、そのことによって初めてお城と、明治からの開発などに繋がるかと思います。

遊亀橋通りを介してですが、ここは桜並木があったりしますが、あまりうまくいっていない。そのためには今どんな可能性があって、どんなことを言うのか。こういうことは実はどの街でもいえるわけです。こういう大きな街は複雑なので、いろいろなことを考えなければいけませんが、どの街でもいえることなのです。

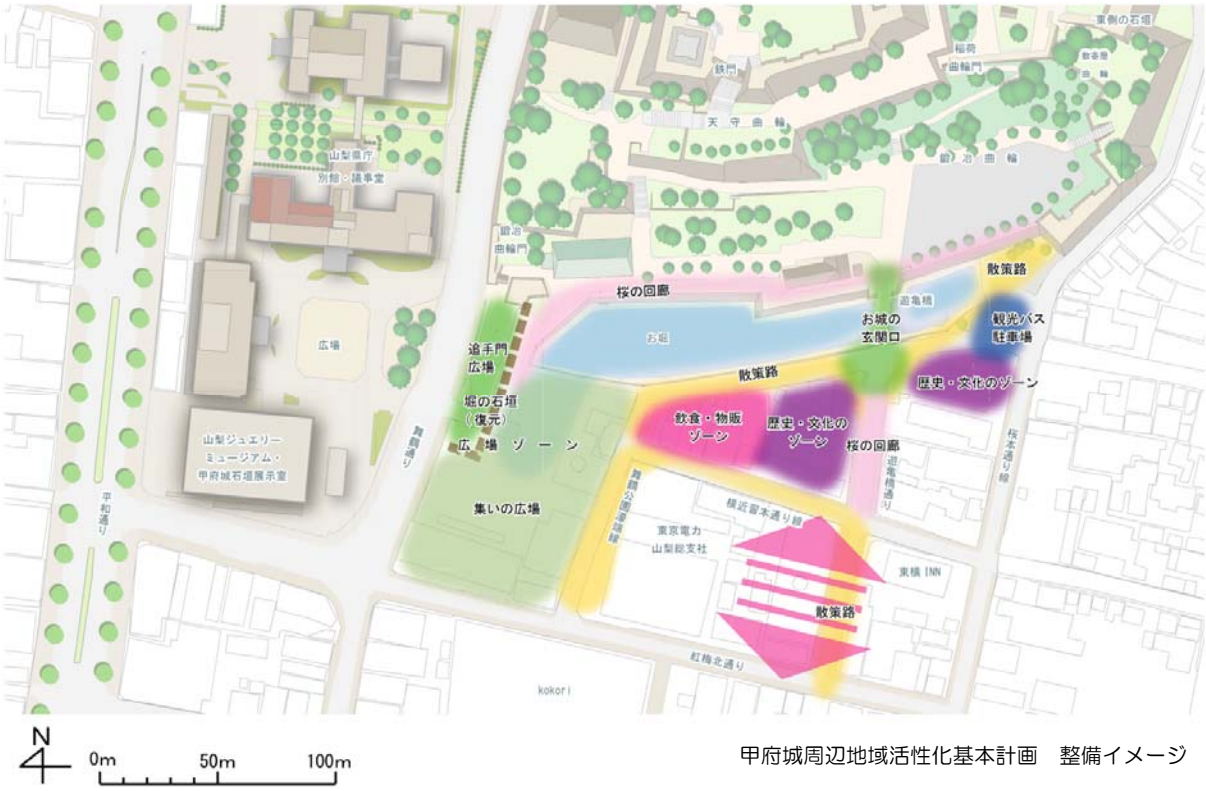


甲府城周辺地域活性化基本計画　歩行者回遊ネットワーク形成方針図

よく見ると、線がつながっていない道路は２カ所です。北から行くのは車がビュンビュン通っているので行かないですし、駅から行くのも、殺風景な、山交のアクセス道路の裏を通るみたいになっているから、あまり人が行かないわけです。ここは、夢小路ですが、最後にガスタンクがあるので、その先に何があるという感じがしない。ここで止まっちゃうわけです。でも、実はここを超えてから、南側に行けば、ここからも城に上がれるし、いいですよね。そうすると、北と南側、もうちょっといろいろな形で誘導できる。実はここの所にあまり人が行っていない。でも、ここの所に駐車場だとか、何かいろいろなこと、仕掛けができれば、いろいろなことができそうだということになるわけです。ちょうどこの辺に地価断層があり、家賃が安いでしょうから、若い人の実験的なお店などは、こういう所に来るのではないかと。

しかし、この赤い点線を描いている所をやっぱりここは何とかしたい。先ほど言いました北側の路地です。ここができれば、北からのアクセスができるので、お城に登ってからどこかに行くというような選択肢が１つ生まれます。これは基本的にはそんなには長くないので、ここの間の所に何か面白い仕掛け、お店が幾つかあれば、それに引きずられて歩けそうな感じがします。

例えばこの踏切、ガスタンクの所は難しいでしょうか。ですから、一番はやいのは、ここが広場になれば、可能性があるわけです。そして、そこに行って帰るのでは、面白くありません。なので、先ほどの遊亀橋通りを渡ったお城側に、ちょっとしたイベントスペースがあります。あのイベントスペースがうまく使えれば、もっといろんなことで使えれば可能性が広がります。ここは道としてはそんなに悪くない道なのです。今はほとんど誰も歩いていませんけれども。遊亀橋の手前、橋詰広場ができます。ここは両側に公共施設があるので、改善されれば、ここに広場ができるんです。このように結んでいけば、民間でもいろいろなお店をやってくれるかもしれない、ということで、ここの所を何とかやろうということです。



甲府城周辺地域活性化基本計画　整備イメージ

そして、私はこのスクランブル交差点の角がやはり１つのこの街のへそだろうなと思うんです。そういうところをもう１回、見直して整備することで、この石垣がサーッと見えるようになれば、甲府の人はどうしても武田信玄にいってしまいがちですが、ここだって１つのコアになるのだということがいえるのではないかと思ったわけです。

そして、先ほどの遊亀橋南側ですが、ここで、何をやろうかと地元の方ともいろいろ議論して、ここはお城の玄関口ということで、歴史文化ゾーンになりました。お城の文化に関すること、くつろぐこととか、カフェみたいなのです。お土産屋さんとか、それから飲食。それからそういうスペース。

そして、広場ゾーンですが、ここに民地がありますので、第１段階は今の駐車場の所を通ってきて、その中でこの道の側も恐らくはそういう憩いのスペースになるような、しつらえに変わっていくだろうかと思います。そして、初めてこちら側とお城とが頭の中で結びつくことができるのです。これもある意味反転なんですね。何も無いところに新しいものができるということで。最終的にはそれを広げていくと、この南側の中心商店エリアにつながるのではないでしょうか。

こうなってくると先ほど言った幾つかの動線がつながってきます。第２ステージ以降の話か、しれませんが、もしうまく歩けるようになるとすると、すごい石垣が見えたり、こちら側はちょっとした神社があって、遊亀橋があったりと面白くなる可能性があると思います。そして、こちら側に車を止められれば、むしろこちら側から入ってくることもできるかもしれません。

駅前からうまくこちらにつながればすぐなので、お城がこんなに近い。多分、駅を下りて５分位で行けるわけです。それは県庁所在地には他にないわけです。

お城の中にもさまざまなものがあり、謝恩碑の塔があります。戦争の慰霊碑はたくさんありますが、あれは皇室の林野を下賜されたことに対してのお礼なので、戦争とは関係ないです。だから、そういう平和のシンボルともいえるようなものもあるのです。

これは最後にこういうふうになったらどうかというイメージ図ですが、川沿いに車が入らないような道にして、そして、公共施設はお城側にオープンスペースを取って、高さを抑える。

これは西から見たときの図です。これが遊亀橋通りで今は桜の並木があるので、これで高さを

抑えると、ここに石垣が見えてきます。だから、2階に抑えると石垣が見えて、お城があることが明確に分かれば、そちらに歩いて行ける。

1つ議論になったのは、広場ゾーンの整備とお堀の復元についてなんです。これは皆さんにも聞きたいのですが、ここをどういう憩いの広場にするかということがあります。もともとお堀はここまであったのです。だから、お堀を戻せという案と広場だから広場にすべきだという案が両論あります。私は個人的には広場でいろいろな使い方を制約なくやるのがいいのではないかなと思いますが、やはりお堀は戻すべきだとこだわる人も結構強くいるのです。ただ、お堀はたくさん埋められていて、ここだけではなかったということもあります。そういった議論があり、ここはまだはっきりとは基本計画としては決めてないのです。

甲府城周辺地域活性化基本計画　整備する施設の意匠を和風とした場合のイメージ

以上が、私の言いたいことの全体ですけれども、ここで言っているような話というのはどこのまちでもいえるのです。

【街をどうデザインするかー当時の生活のイマジネーションを持ち、次の展開に進むことー】

街をどうデザインにするかですが、歴史を見たら、どういう個性があるかということが見えてきます。ただ、そのためには、まずきちんと自分たちの街の歴史をもう1回掘り起こさないといけないので、そのために私が進めるのはまず市史や町史をしっかり読むことです。皆さんは甲府の市史、山梨県史は見たことがあるでしょうか。

それとそういう中できちんと自分たちの街がどのようにつくられてきたか。今日は、行政の方も来ているかと思いますが、やはり自分たちの街がどうつくられてきたかということはちゃんと先輩たちがやってきていますので、それは市史などにも書かれているのです。それからもう1つは古い写真集、懐かしの写真集みたいもの、ああいうものがすごく役に立つのです。つまり、市史を読んでいると、市史を書いている人たちは大体歴史の専門家なので、古文書は大好きだけれども、あまり空間的な感覚がない人もたまにいらっしゃるのです。なので、何々藩士の時代とか何々県知事の時代とか、政治的な仕組みでいろいろな物を語っていくということがあって、街がどう変わっていくかとか、街の生活がどうなってきたかという部分は書いていないことがあるのです。そういうのを知るためには古い写真をみます。例えば昭和の初めのにぎやかな銀座通りの写真などを見ると、こういうことをやっていたんだとか、その頃の建物とか、いろいろなものを見ると、そういうものを造った人たちや通りの生活の様子がよく分かるので、それを今と比べてイマジネーションを持つことが必要です。そうするとこで、次の新しい展開に進めるのではないかと思います。それこそわれわれの世代、皆さんの世代の役割だと思うのです。

過去から、今まで変化し、出来た街というのは実は、それぞれの時代でそれぞれの思いを持ってつくってきたことの蓄積なのです。

普段、街で生活していると、街の生活や、そこに何かがあること、駅や通りやアーケードやお店があることは当たり前と感じてしまいます。当たり前ですから、何故そこにあるのだろうと考えたことがないと思います。しかし、先ほど言ったように駅1つ取っても、やはり造るときは考えているわけです。道路にしてもそうですが、建物は誰かがその建物を建てるときに、この辺に

何を建てたらいいかと投資するわけですから、考えているわけです。ですから、そういうものが積み重なって１つの都市ができてきている。その意味で言うと、今、我々が何か造るということは、それに自分たちの世代として１つ足していくことになる。なので、謙虚にとらえれば、そういうたくさんの思いに対して、今、何を建てるか考えるということです。

中には失敗もあったでしょう。成功しなかったことも多かったでしょう。しかし、思いがあってやってきたことの失敗だったとすれば、今、何かやることでもう少し軌道修正できるかもしれない。今の時代だからやれることってあるかもしれないのです。

つまり、今あるものを当たり前と思わないで、過去の人のいろいろな思いの蓄積が今の都市をつくってきている。そういうものを尊重して、なおかつそこに今のわれわれの感覚をもう１歩加えるというように考えていただくと、街も面白く見えてくるんじゃないかと思います。

今日は甲府を取り上げましたけれども、実は小さい街のほうがもっと面白いです。なぜなら、もっとドラマチックにはっきり出ますから。こういう大きな街はいろいろな構成要素があって、いろいろなものが複雑に絡み合っているので、非常にクリアに何かが出るというのは少ないのです。

甲府の場合は読み方によって、先ほどの様に反転したと、クリアに見える部分もありますが、様々な部分が同時並行で動いています。そういう意味でもっと規模が小さい街だと、もっとクリアに様々なものが出るので、物語としては非常に分かるものがすぐ出てきます。先ほど言ったように、どうしてそこにあるのか？　Why？という姿勢で。

私はこういうことをずっと日本中でやってきました。100 以上の都市で、まちづくりでやったり、いろいろな仕事に乗ったり、具体的に調査を行ったりしました。ですから、どこの街でもこのように考えることができると言えます。

北海道の 100 年たたないような、グリッドだけしかないような街へ行っても、やはり面白いのです。なぜなら、そういう所も道路が何故この様になっているのかというところから始まり、これは向こう側に山があって、真っ直ぐこの山に当たっているのだとか。神社をどこにつくったのかなど、新しい街でどんなに幾何学的にできていても物語があるのです。

なので、ぜひそれぞれの街で、地域資源をもう１回発見して、その物語の先に自分たちは何ができるかということを考えれば、すごく面白いまちづくりになるのではないかと思います。これは行政の人にも、街の人にも知ってもらいたい。そのためにはまずは勉強していただきたい。歩いて勉強して、他の街も見て比べてもらうということの中で自分たちの街の個性をもう１回見つめ直してほしいなと思います。

以上です。どうもご静聴ありがとうございました。

【質問】

司会：ありがとうございました。私も、自分の住む街の地域資源や、街の個性みたいなものがあるんじゃないかなと思います。先生から過去に起きたことであったり、人の流れであったり、そういったものを手掛かりに調べたらいいのではないかなということを教わったような気がします。先生ありがとうございました。

これから会場の皆さまからご意見、先生へのご質問などをお受けしたいと思います。ご意見、ご質問のある方、マイクのほうをお持ちしたいと思いますので、挙手のほうをお願いしたいと思います。どなたかいかがでしょうか。

質問者：今日は貴重なお話をありがとうございました。今日のテーマでは、既に歴史があるような甲府の駅周辺のまちづくりという話でしたけれども、例えば山を切り開くようなニュータウンをつくるような、そういう場合は先生の中で何かこういうまちづくりの根拠になるような思いというのはあるのでしょうか。

西村先生：新しい都市ということですね。新しい都市に私も関わることはあります。最近、割合、私の大学でも戦後にできたニュータウンを調べたいということが結構多いんです。そういう所で生まれた二世の方たちは結構そういうところに愛着を持っていて、実はよく調べてみると、大きなニュータウンはニュータウンの中で引っ越しをしている人が結構いるのです。その意味では今、ニュータウンが少しずつそういうところで変わってきています。そして、例えば全く住宅だけだったのが、ちょっと稽古事の教室ができたり、何かちょっとしたスペースを外に向かって開いていくようなことが起きてきている。つまり、生活が成熟し、また、ある程度高齢化してくると、スペースも余裕があって、そういう所で何か自己表現したいというような人たちが増えてきている。スモールオフィスになっている場合もあれば、何かちょっとした稽古事をやることもでてきます。そうすると、街が最初にできたときとは少しずつ変わってくるんです。それが一体、今、どんなふうになっているのかとか、そんなことを今、実は割合、若い人たちはそういうことが結構好きで調べたりするんです。例えば、戦後にできたニュータウンや郊外住宅地で、遊びはどう変わっていているのかを調べたりなどです。

新しい都市でも、そこに生活者がいる限り、物語は生まれてくるので、その物語を調べてというようなことをやっております。

司会：私から１つよろしいでしょうか。昨年も先生にいろいろとお世話になり、甲府城周辺地域活性化基本計画の策定にご尽力いただきましたが、先生のお話の中でもありました甲府城のお堀の関係ですが。山梨県で今年度、パブリックコメントというのを行いました。先ほど、先生がおっしゃるように県民会館の跡地でお堀を復元したらどうだという、かなり多くの意見が寄せられたわけです。その中で、堀そのものを水辺で復元するという話の他に、堀があったことを、水辺以外で復元するという方法もあるのではという意見もあったのですが、それについて先生、何か考えがありますでしょうか。

西村先生：こういった公園で水がそこにあったことを平面的にデザインの上で表現するようなことをやっているものは結構あります。そういう記憶があるわけだから、そういうものがデザインの上で、ここが水際でここにこういう堀の形があったということはいくらでも表現できると思います。個人的には、私はそっちがいいのではないかなと思っております。

そうしないと、例えば全部水になってしまうと、大きなイベントをやろうとした時、やれることが限られてしまうわけです。あそこにテントを張って、大きなバザーをやるとか、フリーマーケットをやるとか、そういうイベントをするというときに。なので、恐らくちょっと伝統的なイベントは遊亀橋通りの北側のお城の中でやって、もう少し飲食をしたり、音が大きいイベントなど、あまりお城の雰囲気と少し違うものはこちら側でやったらどうかと。こちら側でかなりいろいろなアクティビティーを行うことができるようなスペースが必要だと思うのです。なので、私は平面で、お堀のデザインを何か工夫して、広場をとればいいのではと思います。そうすると、お堀を復元したいという人たちの思いもかなえられるのではないかなと個人的ですが思うのです。

質問者：私は錦町で育ちました。先生が何度も名前を呼んでいただいて、大変懐かしく思いました。でも、今はもう東京のほうへ行っておりますが、やはり古里のことを大変気になっておりまして、最近も甲府の夜の街に出たのですが、あまりの寂しさに本当に驚いてしまいました。今日は先生のお話を伺いたくてまいりました。

お話を伺っていて、本当にお城は駅の近くで、私も東京から知人達を小グループで年に 2～3 回はお連れするんですけれども、甲府は街を歩く所がないのです。ですから、お城へ上って、ガイドさんにご説明をしていただいたりするのですが、滞在するという、そういう楽しみがないのです。私はお堀の周りを昔はよく遊んでいましたし、ウナギ屋さんがあったりして、ヤナギが生えていて、なかなか水辺の風情があったものです。今はああいう状態になってしまって非常に残

念ですけれども。
　私は県民会館の跡地の広い所を広場にするというのもいいアイデアだと思うんですが、もうちょっとお堀を広げて、そして、そのお堀の周りが周遊できるようになって、石垣があるからということもあるんですが、そこに少しお堀のほうにせり出すようなことができれば、そこにお茶屋さんとか、カフェとかギャラリーとか、あるいは甲府はジュエリーですが、ジュエリーもなかなか店頭で見るという機会がないものですから、そういった女性好みのものをできるだけつくっていくと、甲府へ来たときにご案内するのがとてもいい場所になる。それがまた先生が言われるように回遊動線につながって、銀座通りのほうまで下りていくという、そんな夢がもてるのではないかと思いながらお話を伺っておりました。ありがとうございました。

西村先生：お堀という話ですけれども、これは関心が結構高いこと思います。なので、こういう議論をずっと続ければいいと思うんです。どうするかということをずっと議論すると、皆さん思い出があり、色々な思いがあるから議論が盛り上がるということです。そこで最終的に決めればいいと思うので、今すぐ最終の計画にならなくてもいいのかなと思います。
　今の県民会館の跡でなくて、税務署の跡とか、社会教育センターの跡とか、もう少し遊亀橋に近いほうに建物があって、向こうに引き込んだらいいんじゃないかという議論が割合出ました。
　その中には今おっしゃったような、歴史文化の感じられるものとか、印伝や、宝石の様な特産のものをやるのもいいんじゃないかというような話も出ました。最初はもう少し県民会館でドーンとそういう物産センターを造ったらいいのではないかという話も出ていましたが、議論していくうちに、手前で全部終わらせるのではなくて、奥まで行ってやったほうが全体としていろいろなことができるのではないかという議論に進みました。ここも本当に夢がある所だし、いずれにしても、あと数年のうちに更地になるんですよね。なので、どんどん変化していくので、この後、どうするかということです。今は基本計画で根本は議論しましたけれども、実際どうするかというのは本当に１個１個現場で議論ができるので、その意味では、議論をすることによって周りの人たちもこういうことができるとすれば、こんなことも周りでやれるのではないかとか。実はこの辺に民間の方々の所もありますが、こういう所の町会の方も議論に参加していただいているので情報はいっているのです。そうすると、今も空いているビルもありますし、これは県と市と両方でやっていたものですから、そういう方向でいくと言うことになれば、自分たちの所も考えないといけないじゃないかという雰囲気にはなってきたんです。それも前向きに考えるという。なので、そういう機運が盛り上がって、今のような話がいろいろな形で出て行くと。計画のイメージは徐々に膨らんでいくんじゃないですか。非常にたくさんの思いが出るといいのかなと思います。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。今、先生がおっしゃるように、今、会場の方から意見をいただいたんですが、当初、県と市も観光客を対象にこのエリアに何を造ったらいいかということでスタートをしましたが、先生たちと委員会を重ねていくうちに来街者にもいいものであったり、それから住む方にもいいものであったりという、意見を重ねるうちでいろいろ変わってきたという経緯もありますので、今後も議論を重ねていきたいなと思っています。他にいかがでしょうか。

質問者：甲府市はこれからリニアが引かれているというようなこともあって、甲府駅とリニア駅で二極化するようなことが考えられます。今後のまちづくりの参考として、先生は何かお考えがあるようであれば、教えていただければと。

西村先生：リニアの駅はちょっと離れてできますよね。これまで新幹線新駅などが出来ても、新しい駅の周辺というのは大体駐車場ができて、コンビニとちょっと食べる所ができて、それで終わりというところが多いです。だから、あまりそこに大きな開発が誘導されているという例はあ

まりありません。むしろ、いかにこちらの都市にうまくつなぐかということになるじゃないかなと思うんです。飯田もかなり離れていますが、そのように考えています。新しくできる所にはあまり都心的なものを置かないということです。

郊外に人が流れていって、都心にあまり人が来なくなったというときにまた新幹線新駅で次の開発をやるのはどうなのかと思います。ですから、私の感覚だと、やはりリニア新駅はいかにコンパクトで、こちらの都心とうまく結んでいけるだろうかということが大事なのではないかなと思うんです。例えば岐阜羽島などですと、新幹線ができて、もう 50 年以上たっているのに都市化しているかというと、なかなかなっていないです。新横浜はなりましたけれども、それは 350 万人の人がいれば、そうなると思いますが、通常そうもいかないわけです。その意味でいうと、私はあまり大々的なことをやるよりも、駅を降りたら、緑が覆っている所におしゃれな幾つかの施設があって、スムーズに乗り換えられ、都心に行け、都心のほうできちんと受け止めるようなことができないかなと思うんです。私だったらそうしたいなと思います。

質問者：今日は貴重なお話をありがとうございました。先ほど、県民会館の跡地の所の堀を復元するかしないかとか、いろいろな議論をこれから重ねていったほうがいいということはまさしくそのとおりだと思います。そんな中で先生がおっしゃられた堀があったことをデザインで表現するということが非常に興味深いですけれども、そういったことの先進的なというか、良い事例があったら教えていただければ、見に行きたいなと思って質問させていただきました。よろしくお願いします。

西村先生：今ちょうど動いている所でいうと、福井市の中央公園という公園があって、そこはまさに堀を埋めた所が非常に大きな公園になっています。公園ですけれども、昔の公園だったものですから、噴水や、さまざまなものがあって、森みたいになってしまっていて、夜は女性が怖くて入れなかったりするので、今、大きく公園を造り替えています。そこでは、ちょうどお堀にまたいで公園ができたものですから、お堀を復元すべきだというような意見が強く出ました。しかし、公園の真ん中にズドンとお堀が出来てしまうと、本当に 2 つに二分されてしまうので、基本的には平面でやることになっています。少し浅い水を入れていることは確かだと思うんですが、今ちょうど工事をおこなっているところだと思います。

気持ちとしては分かるのですが、いかにそれを現代的にやるかということがあります。いろんな所でお堀の周りで議論をすると、完全復元という声も出てくるのです。でも、完全復元といっても周りが近代的な建物になっているのに、そこだけ完全復元して、陳腐になってしまうというのがちょっと心配なので。だとすると、もちろんお城の中は建物であれば、もう少し完全復元したい話もいいと思いますけれども、本当にフリンジで周りに近代の建物がある所なので、そちらとの関係もやはり考えないといけないと思うのです。なので、そういう形の新しいデザインで水を感じさせられて、しかし、あまりアクティビティーに制約がないようなものというのが福井でも考えられていると思います。

司会者：会場の時間もありますので、質問は以上とさせていただきます。西村先生におかれましては、大変お忙しい中、ご講演及び質問に対応していただきまして、ありがとうございました。

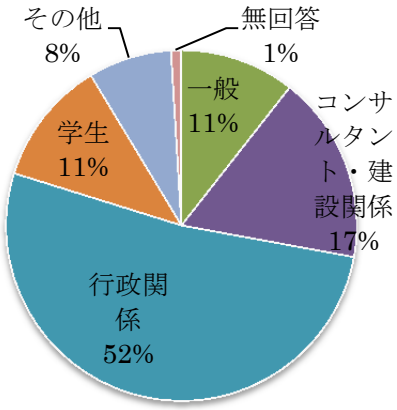
■第２８回ふるさとまちなみデザインセミナー

日　時：平成２９年２月２４日（金）　１４：００～１５：３０
場　所：山梨県立図書館　多目的ホール
参加者：１４５名

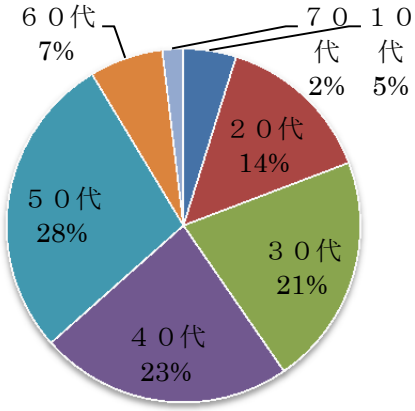
○参加者アンケート結果（抜粋）

アンケート回収数：１０４（参加者に対する回答率７２％）

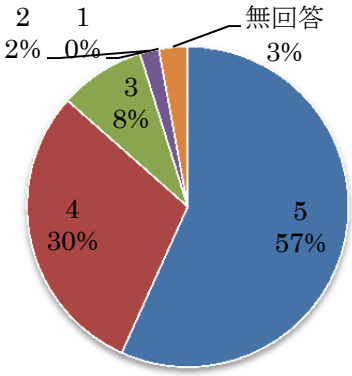
①職業



②年齢



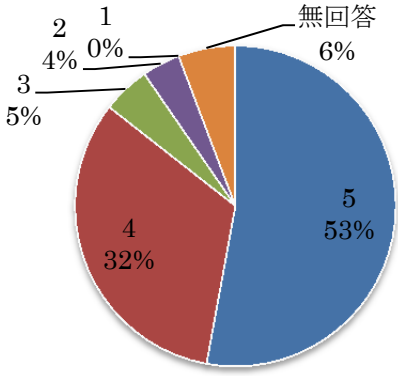
③セミナーに参加して良かったと思うか。（良かった　５－４－３－２－１　悪かった）



○主な理由

- まちづくりにおける歴史性の大切さが学べた。
- 「何もない」と言われがちな甲府中心だが、とても面白いものを秘めていると感じた。
- 甲府で武家地と商業地で機能が反転していることや、駅と城が近いのが珍しいことを知ることができた。
- 土地の歴史を読み解いて、そこにつなげる考え方はとても重要だが、山梨県や甲府市では、新しいものに取り組む傾向があり、コンテクストを強調する方向性を提示してもらえるのは、とても有り難い。

④本セミナーはまちづくりの参考になると思うか。
（参考になる　５－４－３－２－１　ならない）



⑤まちづくり（都市計画）について思うこと

〇主な意見

・短期的に全てを整備するのではなく、個性を活かしながら時間をかけて、その時代に合った整備を継続して行っていくのが良い。
・人が居続けたいと思えるような街作り、元住民が帰りたくなるような場所をつくって欲しい。
・公園のスペースをイベント等にもっと活用して欲しい。
・歩道をもっと広くして欲しい（人々が行き交う幅が欲しい）。
・歴史をふまえて、まちづくりをする。その上でストリーが語れるようにすべき。かつ、次の世代に自信を持って伝えることが出来るようにすべき。
・地域の人と行政職員とが、意見を交換する機会が必要である。
・地域資源を大事にするのは、もちろんだが行政やまちづくり団体だけが取り組むのではなく、地域住民をうまく巻き込んでいかなければならない。
・自然に囲まれているからなのか、公園が少ないと思う。公園の必要性を考え直した方がよい。コミュニティの生成できる場であり、憩いの場になるから子どもを育てやすいと思うようなり、若者が増えるかもしれない。
・大好きな山梨に貢献したいから山梨のまちづくりをして山梨を元気にしたい。
・甲府の市史が場当たり的（武家地・反転の市史）であるのことが誇れるものなのか考える必要はあると思う。
・街の中心街をもっと歩きやすくすべき。フリンジ駐車など車を外に。
・知事が目標とする 100 万人都市に向けて、明るい、おもしろいまちづくり（開発）をして欲しい。
・コンパクトなまちづくりを進めるべき。
・山梨の良さは東京に近い田舎。具体的には、自然と農業景観だと思う。スプロール化、秩序ない開発を規制すべき。
・人を大切にするまちづくりになれば良い。
・目的を住民に伝えたまちづくりをお願いしたい。
・甲府に大学があり、学生など若い人がたくさんいるのでそれを活かせば良い。
・民間活力を積極的に取り入れていき、まちづくりのビジョンが官民で共有できるような機運を高めることが大切。
・都心に年寄りが住めるまちづくりをして欲しい。
・中心市街地が活性化することを望みます。
・スプロール現象がここまで進んで来てしまったので、街の形の組み直しを大胆にしたらよいのでは。細い路の路面や魅力を活かす意味で、小さな建物や店舗をつくり、城下町の奥行き感を大切にするのが良い。
・山梨県の資源を再発見して、世界文化遺産富士山と関連させてよりよい観光地になることができるのではないか。

⑥取り上げて欲しいテーマ

〇主な意見

・観光やまちづくりセミナー。
・交通と都市、モビリティマネンジメント。
・再開発や震災復興のまちづくり等。
・公民連携のまちづくり。緊縮行政下におけるまちづくり。
・空地、空家をどうしていくか。再生できるか。
・まちづくりの現場で頑張っている方たちの話。